

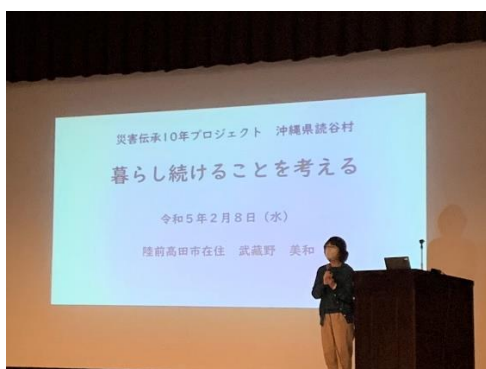
開催地名：沖縄県読谷村	
開催日時	令和5年2月8日（水） 15：30 ～ 16：30
開催場所	沖縄残波岬ロイヤルホテル
語り部	武蔵野 美和 （岩手県陸前高田市）
参加者	自主防災組織、自治会、観光協会、民生委員児童委員、消防団等 約70名
開催経緯	<p>当村では、村民が自主防災活動をより効率的に行うため、地域ごとに自主防災組織を設立することを推進しているところであり、これまで訓練や講演会等を実施してきた。しかし、現在は急傾斜地及び沿岸部地域の5つの自主防災組織のみの設立にとどまっており、村として自主防災組織の結成を積極的に推進することや、既存組織の育成強化が課題となっている。また、本村においては、西海岸沿いに多くのリゾートホテルがあり、観光関連も含めた津波避難体制の強化が必要となっている。</p>
内容	<p>（１）震災被害の背景</p> <p>私が住んでいるのは、岩手県陸前高田市という人口約1万8,000人ほどの小さな市である。岩手県の南部にあるため比較的温暖な地域で、伊達藩（宮城県）の文化を併せ持った文化を持つ特徴がある。陸前高田市の象徴とも言える白砂青松の高田松原は、市民はもとより県内外の来訪者からも愛される場所だった。約7万本と言われる松は、「奇跡の一本松」以外ほとんどが流されてしまった。また、岩手県でありながら、伊達藩（宮城県）の文化を併せ持った文化を持つ特徴がある。この陸前高田市は、皆様のご存知のように東日本大震災で起こった津波の影響で、大きな被害を受けた。本日は、その災害経験から避難や備えについて等のお話をさせていただきたい。</p> <p>（２）東日本大震災時の状況</p> <p>2011年3月11日の午後、マグニチュード9.0の大きな地震が発生した。陸前高田市の震度は6弱で、約160秒揺れ続けた長い地震だった。地震そのものより、しばらくしてからやってきた津波による被害が大きかった。東日本大震災の死者の95パーセントが津波による溺死だと言われている。津波の恐ろしさは、いろいろなものを破壊しながら、水が塊で襲ってくるところだ。地震発生から40分ほど経った頃、気仙川を火事のような煙と砂埃を上げながら津波が遡り、市役所や消防署などの公共施設は全壊した。</p> <p>川の近くに建物が集中していたことから、津波を予測して真っ先に高台や建物の屋上へ逃げた者は難を逃れたが、多くの市民が地震の揺れで倒れたり落ちたりしたものを片づけている最中に津波に遭遇し、巻き込まれて犠牲になった。子どもたちは学校で避難して無事でも、家にいた家族が津波に巻き込まれてしまったケースも多く、岩手県全体で94人、陸前高田市だけで32人の震災孤児も発生した。また、行方不明者を含む死者数は1,758人に及び、11年半が経過した今でも、202人の人たちが行方不明となっている。</p> <p>この経験を通して、私はひとりひとりが「災害が起きたらどう動くか」ということを常に考える意識が大切だと強く感じた。住んでいる場所や、置かれている状況を見て、どう避難するのが安全なのか、一人一人自分で考えることが大切である。また、防災に関して自分たちが学んだことや得た情報を、地域の人たちに伝えていくことによって、災害発生時により多くの命が救えるということを感じておいてほしい。</p>

(3) 災害に対する心構え

自分の命を奪ってしまうもの、もっと広く言えば、自分や家族の笑顔を奪ってしまうもの、そのすべてが災害である。普通の暮らしが続けられる工夫、安全に命や生活を脅かすものすべてを災害ととらえ、そして、これらの災害を防ぐことが「防災」だと意識してほしい。自分の住む地域の災害リスクをハザードマップなどで知ることは必要であるし、以前の津波や洪水の被害について知ることも大切なことだ。

近年は地震や台風などの自然災害が増えてきていることから、非常時持ち出し袋を準備するなどして、1次防災や2次防災の備えをしている人は多いかと思うが、自宅で好きなものをストックして、消費したら補充しておくことにより、使いまわし、循環が行われ、これが備蓄につながる。生活者の視点で物事を考えていくことが大切である。多様な人たちの存在を認識して、それに合わせて対応しなければならない。毎日の生活をよくするための工夫が、いざという時の避難所の生活や安全に非難する事に繋がるはずだ。

また、自分にとって大事なものをいつでも持ち出せるようにしておくことも重要だ。外出中に災害が発生した際に、外出先から自宅や避難所まで安全に移動するための助けになる備えを0次防災と言う。0次防災用のグッズを普段使用しているバックに入れておき、常に持ち歩くことも推奨したい。0次防災への意識は、緊急事態での安全と衛生を確保するために必要な、言わば生きるための基礎となる。日頃から「万が一」を考え、自分の命を守るための「備え」を意識してほしい。自分にとって必要なものについては、自分で備える必要がある。



開催地より

経験者による具体的なお話を聞くことで、災害の具体的なイメージをつかむとともに、災害に対する備えや、暮らし続けていくためのヒントについて、学ぶことができたと思う。今日のお話しを受けて当市では、村民の防災意識の向上に向けた啓発活動を積極的に推進していく所存である。